

# 『アテネの廃墟』における 視覚体験としての舞踊

大阪大学大学院 古後奈緒子

今世紀初頭のウィーンの舞踊芸術に関する言説には、19世紀の遺産を引き継いだバレエ作品—豪華な舞台美術と衣装、大きなフォーメーションを特徴とし、バレリーナの人気と技巧を前面に押し出すような—に対する二つの姿勢を読みとることができる。ウィーンの伝統として肯定するものと、芸術的または社会的な視点から批判するものとである。リヒャルト・シュトラウスが芸術監督を務めた時代（1919年～1924年）の国立歌劇場には、具体的な方向性の違いこそあれ、後者の立場をとるバレエ制作者が集った。以下にとりあげる祝祭劇『アテネの廃墟』（1924年9月20日ウィーン初演）は、作曲家シュトラウス、文学者フーゴ・フォン・ホフマンスタール、振付家ハインリヒ・クレラー、舞台美術家アルフレート・ローラーによって試みられた、総合芸術としての舞台舞踊の刷新の一例である。製作の軸となったホフマンスタールの意図と手法は、以下のように読みとられる。

原本は、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンのバレエ音楽『プロメテウスの創造物』と、アウグスト・フォン・コツェプーの戯曲作品『アテネの廃墟』である。これらを下敷きとすることの意図は、ヨーロッパ文化の源であるギリシャを舞台に、文化の創造への意志に絡む主題を展開することにある。主人公は、ホフマンスタールの同時代の文化状況に対する危機感を反映して、ギリシャの地に理想を求める「異邦人」とされた。彼の理想探求の過程が、現代ギリシャの風土や古代ギリシャの舞踊文化との対峙において綴られていき、最終場面の女神アテナとの結婚を暗示するパレードで理想との合一が果たされる。この結末に至る過程と、その舞台上における視覚化の手法には、ホフマンスタールが抱く舞踊の理想を実現化するための次のような戦略が認められる。

ホフマンスタールの舞踊表現の理想を一言でまとめるなら、それは、人間存在の内面における生の充溢—主客が消滅する儀式的瞬間でもある—を「マイムの表現」において開示することである。このマイムの表現は劇行為を説明するものではなく、物語において言語が沈黙する場、意味の空白において感性的に作用する。このことと関連して、『アテネの廃墟』の主人公として理想を追う異邦人は、劇行為の積極的な担い手というよりむしろ、受動的な鑑賞者という性格を与えられている。彼の目を通したイメージの連続という形で進行する場面は、以下に説明されるように、結末へと到達するために段階的に設けられた認識の契機をはら

んでいる。

作中で異邦人は、イスラム支配によって荒廃したギリシャの風土を目にした後、アクロポリスの丘に向かい求める理想を吐露する。そこで表される主体の消滅、対象との一体化といったモチーフは、異邦人の願いに呼び出された古代ギリシャの輪舞 Reigen に彼が参加することで満たされたかのようである。しかしそれは夢の中での出来事であり、バッカス祭へと盛り上がる段階で現実に戻った異邦人はこれを拒否する。それによって「より高次の理想」を求めるに至った彼は、この願いに呼び出されたパレードについて行く。このパレードがマイム的な表現によって実現されなければならない箇所であり、具体的な表現内容—高次の理想の内容—については知らされない。ホフマンスタールがギリシャ旅行から起草したテキスト「ギリシャでの数々の瞬間」を参照すると、彼自身が旅の途上で体験した神秘的な視覚体験—彫刻の鑑賞の最中にもたらされた認識主体の解体と対象との合一—へと至る過程と、以上の台本進行との間に平行性を読みとることができる。したがって、台本におけるより高次の理想とは、この二元論に立つ認識における主客の関係の解体が、視覚において体験されることだと考えられる。そして、主人公が基本的に見る者として性格づけられていることにより、鑑賞者が主人公の視点を通してこれら舞台上の事象—古代ギリシャの舞踊→司祭の率いるパレード—に向き合うとき、彼と同じ舞踊観賞のプロセスを追うことができる仕組みになっている。

『ヨセフ伝説』、『カルナヴァル』に続きホフマンスタール作品に取り組んだクレラーは、この祝祭劇の要である舞踊場面の現実化においても、ホフマンスタールから高い評価を受けている。その振り付けノートから、クレラーが1915年に発表した『バッカス祭』を下敷きにした『アテネの廃墟』への改訂が詳細に知られる。そこでは主人公が舞踊を視覚的に体験するか、それに巻き込まれるかが振り付けのフォーメーションに明確に反映されている。また、ローラーの舞台美術も、舞踊を見せる第二場面ではプロセニウムアーチを枠とする絵画的な構図をとるのに対し、理想が体験される第三場面はそれを象徴するための道具である階段を多用し、客席を見つめかえす彫像に両脇を守られている。これらの例は、観賞をとおして儀式的な舞踊に参加し、理想との合一を果たすというホフマンスタールの祝祭劇の意図を、効果的に実現するための配慮と捉えられる。

以上のように『アテネの廃墟』は、視覚体験を重要な契機として執筆されるホフマンスタールの演劇作品一般の中でも、際だって見るということを前に押し出した作品構成となっている。その主題と作品構成の手法には、舞台舞踊芸術における実験精神がうかがえる。